2020年7月26日

「福音に生きる」

マルコによる福音書９章４２－５０節

森島 牧人 牧師

今日の聖書箇所には、主イエスの厳しい言葉が続いています。「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。・・・」と。その言葉は足や目にも及んで続いて行きます。ただし主のこの激しい言葉は、同じ時、同じところで語ったものではなく、いろいろな時や場所で語られたものを、まとめて書き記したと言われています。マルコ福音書はこれを通して何を伝えようとしたのか、考えて行きましょう。

この主の言葉の記述は９章の真ん中あたりのものですが、この頃弟子たちと主イエスの間には、本来あるべきはずの共通理解が崩れ、亀裂が生じていました。それは主イエスが、自分を待つ十字架のこと、それによって人の罪が贖われること、自分こそが救世主であることなど、神の奥義について語り、その言葉に沿って出来事が起こって行く中でのことでした。主の言われることが理解出来ない弟子たちにとって、主イエスは＜つまずき＞となっていたのです。このような弟子たちに向かって、この厳しい言葉は発せられたのでした。

この中の「わたしを信じるこれらの小さな者」とは、主を受け入れた多くの人々、つまり弟子たちや私たちもその一人です。それでは、その小さな者を「つまずかせる者」とはどういう者でしょう。非常に強い言葉である「つまずく」とは信仰を失ってしまうことで、英語ではスキャンダルすなわち妨げ・障害物・罠と言った意味です。人が神と生きて行くのを妨げてしまうという恐ろしい罪、しかもここで重要なことは、主がこれを弟子たちに向かって語られていることです。つまり、「つまずかせる」こととは、信仰者（教会）の中で起こるとするこの主の警告を、私たちは畏れを持って真剣に受け止めなければなりません。他者の信仰を失わせる、それは私たちが信仰の強い者でありたい、教会の中で立派な者でありたいと頑張っているうちに、いつの間にか、自分の周囲の人を＜小さな者＞にしようとしてしまうことによって起こるのです。すべては信仰の熱心さが目指す方向性に、問題があると言えるでしょう。

さて、この＜つまずく＞という言葉の使い方、またその言葉が持つ意味、そしてその言葉の持つテーマが、今日の聖書箇所では、４２節の「他者をつまずかせる」というものから、「自分がつまずく」（４３節）ことへと入れ替わっていくのです。つまり、ここで主は、信仰に於いて私たちがどう励み、どう努力するか、そしてどの方向に向かうべきかについて語られているのです。本当の意味での信仰の強さとは、豊富な知識を持っていることや立派な奉仕をすることではなく、「つまずかない」ということ、これこそが私たちが真に求めて行くべきことだと教えておられるのです。

教会でどんなことがあっても信仰を失わず、目立たないところで教会を支えて行く、それが本当の信仰の強い人なのです。「つまずかない」とは消極的なことのようですが、とても大切で、しかも難しいことです。立派な奉仕をしている人が、最中に突然つまずき、教会を離れることもあるのです。それは人の評価を拠り所としていて、神との関係がしっかりしていないからでしょう。人間同士の関係の上でなく、神の恵みにのみ根拠を置き、その神の恵みが揺らぐことのないことを確信して行く時、私たちの信仰は深まり、決してつまずかない真の強い信仰に立つことが出来るのです。

もし手や足や目が神との関係を妨げるなら、それを捨てよと。もちろんその時人間は自立出来なくなります。しかし主イエスは、あえてその＜弱さ＞に生きよと言われます。たとえ不自由な体になったとしても、＜神の恵みによって生きる者となりなさい＞と、主は語っておられるのです。

（説教要約　羽入田悦子）